

# KCELS

Newsletter No.11  
MARCH 1996

## 第20回KCELS大会を終えて

上 紀 子

戦後50年の昨年は、阪神大震災に始まり地下鉄サリン事件、そしてフランスの核実験再開とまさに多事多難な一年であった。大きな天災、人災が私達の生活、生き方を土台から揺さぶったという意味でも大きな節目の年であった。はからずも、私達のKCELSも発足して20年目という大きな区切りの年を迎えることになったのは感慨深いことである。

今年度の年次大会は、震災による学年暦開始の遅れもあり例年より約一ヶ月遅れて12月8日に開催された。特別講演の講師として青山学院大学の青山誠子教授をお迎えして、映像を用いた大変興味深いお話を拝聴することが出来た。思い起せば、この英文学会を運営していくに当たり、一つのモデルとして参考にしてきたのは青山学院の英文学会であった。特に青山学院大学では学部二、三年生もプログラムに参加しているという事であり、私達の学会でも、より充実化を図るためには学部学生の積極的な参加が強く望まれたからである。

20年の年輪を加えることで蓄積されたこの学会の成果、疑いのないものであろう。そこでこれからのKCELSの更なる充実化、活性化に向けて、在学生のこの学会に関わる意識を高めるための何らかの企画に取り組んでみてはどうであろうか。例えば、ある特定のコースを対象とした優秀論文賞の発表、テーマ別ゼミ研究発表といったものをプログラムの一部に加えることにより、学生のKCELSへの参加を高めるとともに、ひいては、四年次でのゼミにおいて学生と教員、又、学生相互の問題提起や議論が積極的に行われるように結びついていけばと思うのであるが如何であろうか？願わくば今年はKCELSの活性化に向って、この様な展望を開く年にしたいものである。皆様方からの貴重な御意見、アイデアを切にお願いする次第である。

## ■特別講演（要旨）

### シェイクスピア劇のダイナミズム —英国文化から世界文化へ—

青山学院大学教授 青山 誠子

シェイクスピア劇は英国文化の代表であるのみならず、今や世界文化の重要な一部になっている。1991年8月に東京で開催された国際シェイクスピア学会大会は、「シェイクスピアと文化的諸伝統」を統一テーマに掲げ、従来のシェイクスピア研究のアプローチの多くが根底から揺り動かされるような講演や発表が相次いだ。かつては彼自身の時代を超越した天才として奉られてきたシェイクスピアの劇が、実は複雑で多面的なその時代の諸イデオロギーの葛藤からこそ生まれ出たのだ、ということが注目されたのである。「時代の鏡」「社会の鏡」としてのシェイクスピア劇が、時代や文化や言語の別を超えて、各国で受容され、驚くべき勢いで翻訳・翻案・上演され、生き続けるのはなぜだろうか。



主な理由は三つ考えられる。まずシェイクスピアの作品が、他の文学形式ではなくて、実に多くの人間——作者、演出家、大勢の俳優やスタッフ、そして大勢の観客——の参与によって成立する演劇という総合芸術であるゆえに、上演と受容の無限のヴァリエーションを生み出しう

ること。第二に、シェイクスピアの時代が、英国ルネサンスの最盛期から爛熟期にわたり、新旧の多様な価値観が混在する社会全般の変動期であったこと。最後に—そしてこれこそ最大の理由として—そのような複雑で多面的な時代・社会相、そこに生きる人間の諸相を、まるごと包括・凝縮して劇化しえたシェイクスピアの驚くべき才能である。

シェイクスピア劇の多くは、例えば『夏の夜の夢』や『ハムレット』のように、複数の異質の世界や異質の価値観が共存し、せめぎあう劇、また時代設定もさだかならぬ、しかも外国を舞台にした劇である。戯曲生成の歴史をたどると、例えば「ハムレット物語」は、中世の北欧伝説から始まり、13世紀初頭に「デンマーク史」に取り入れられて16世紀初期にラテン語の歴史書として出版され、その後は16世紀末のフランスの散文物語、さらに英国では今は失われた「原ハムレット」のロンドンでの上演を経て、17世紀初頭のシェイクスピアにたどりつくというように、約400年に及ぶ時間と広大な地域を包含している。

このような特徴をもつシェイクスピア劇は、その作品の本質をしっかりと把握さえすれば、時代や場所をどのように設定しても大して失うものはない。それどころか、すぐれた演出や翻訳の工夫により、各時代・各国の観客にかえって強くアピールするダイナミックなエネルギーを引き出しうるといえよう。

最近日本で上演された日本および各国のシェイクスピア劇の中から異色のものを選び、今やシェイクスピア劇が世界の諸文化の中にしっかりと根づいていることを、映像によってお見せしたい。例えば1988年の蜷川幸雄演出による『ハムレット』は、新旧世代の対立を強調すべく、サムライ的な衣装と現代服を、また坪内訳と小田島訳を併用した。1988年のスウェーデン王立劇場のペルイマン演出・主演による『ハムレット』は、最後にホレーショまでがマシン・ガンで虫けらのように殺され、衝撃的な現代劇となった。1990年、ロシアのリュビーモフ演出の『ハムレット』は、全体主義国の圧制下で孤独な戦いを続ける人間の苦悩と無力感を、暗色の大カーテンの不気味な波動によって暗示した。また、ハムレットの繊細さを浮き彫りにする、女優主演によるポーランドと日本の上演例もあった。1995年1月、北京人民芸術院による上演では、ハムレット役とクローディアス役、あるいはポローニアス役が、ある場面で突然入れ替わるという、観客の意表をつく演出により、権力の座の不安定さ、またあらゆる人間がハムレットであるというメッセージをこめて、権力批判とアイデンティティの問題が鋭く追求された。

こうして、シェイクスピア劇は、現代、そしておそらく将来においても、異文化と接触するたびごとに、各国・各民族の政治的・社会的諸状況を映し出す鏡としての役割を果たし、自由自在に変容しつつ、生命を更新しつつけていくのである。

## ■研究発表（要旨）

### 日英対照 感情表現の Argument Linkingについて

田岡千明

心理動詞の一つである感情動詞の2つの項の意味役割は、通常経験者と刺激、と定義される。これらが、文法関係においてどのように実現されるかというargument linkingについて、経験的問題のあるこれまでの主題役割と主題役割階層という理論的構成概念を排除し、認知意味論的causal structure (CS)をもとに、日英語の感情動詞の考察を行う。

CS分析では、ある事象は、一つの個体が別の個体に作用する力動的因果関係(causation)に細かく分解される。この事象構造をargument linkingに結びつけるために3つのルールが次のように設定される。(1) 動詞の語義の一部分を形成する動詞のプロファイルが、主語、そしてあれば、直接目的語で、残りの事象構造より切り離される、(2) 主語は目的語に先行する、(3) 直接目的語の位置を中心にCSにおいて前に位置するものを前方斜格、後にあるものを後方斜格とする、ということである。更に、動詞のプロトタイプを使役、変化、状態の断片部分から成るものとする三分割法により、動詞を使役動詞(使+変+状)、変化動詞(変+状)、状態動詞(状)、活動動詞((使)+変)と分類する。

このように語義相の違いを中心に日英の感情動詞をタイプに分け、そのcausal structureを見ていくと、実は、日英間の経験者と刺激の文法関係での表われ方にあまり違いはない。両言語において、使役動詞では、経験者が直接目的語、刺激が主語となり、変化動詞では、経験者が主語、刺激は斜格、また活動動詞では、経験者が主語、刺激は斜格(日本語では直接目的語の場合もある)である。そして、唯一大きな違いが見られる状態動詞では、英語は経験者を主語、刺激を直接目的語としてとり、日本語では両方を主語として表している。これは、刺激側から(刺激が経験者に感情を抱かせる)と経験者側から(経験者が刺激に対して注意を向ける)の異質の力の働きかけにより二者の関係が例外的に力の均衡関係にあるとすることで説明できる。

## キャンパスニュース

### 「キャサリンとヘンリーの フランス語会話—— 『ヘンリー5世』における外国語」

齋藤 安以子

シェイクスピアの作品において、場面や出身の設定は人物の使用言語にほとんど影響がない。言語に特徴がある外国人キャラクターはもっぱらコミカルな効果をねらっていると解釈され、特有の発音や、2言語の洒落や言葉あそびが、これまで分析の対象となってきた。この研究では、主に3つの場面でフランス語が用いられるシェイクスピアの『ヘンリー5世』を題材に、非標準(+MARKED)の言葉の使用がおよぼす作劇上の効果に注目する。

劇に登場する他のフランス宮廷人たちがなめらかに英語を話すにもかかわらず、フランス王女キャサリンには劇半ばに英語の初歩のレッスンの場面(3.4)が用意されている。次に、英語が話せないフランス兵士が捕虜として登場する場面(4.4)があり、最終幕で、イギリス王ヘンリーが、英語のたどたどしいキャサリンに、フランス語まじりで求婚する。

はじめの2つの場面は、前後の緊迫した戦いを緩和するコミカルな一瞬であると同時に、王女キャサリンの認識力や成熟、不自由な言語媒体を介しての意思伝達のモデルを、求婚場面の伏線として提示する。求婚の場面では、2つの理由からヘンリーのレトリックが通用しない。当事者たちの互いの母国語の操作能力(不足)もさることながら、ヘンリーが飾り立てた言い回しを使う度に答へはぐらかすキャサリンの戦略が影響している。

「戦勝国の王が敗戦国から講和の第1条項として王女を娶る」という政治上の一方的なパワー・バランスは、互いの言語をしどろもどろに話し、レトリックを放棄せざるを得ない求婚の談話によって、より対等に近い2者関係へと変わる。優れた政治的指導者が婚姻によって補完されて理想の王となるという図式に加え、他者を圧倒してきた強大な王ヘンリーが、外国語の介入でそれまでとは全く異なる立場におかれている。つまり、個々の場面でのコミカルな効果以外に、前後のプロットとのコントラストや使用言語に伴う対人関係の変化といった、+MARKED言語の使用の意義が読み取れる。

\* John A. Roe 客員教授は、一年の任期を終えられ3月末英国へ戻られます。

\* かわって、1996年4月より、北アイルランドから Colin Meir 博士(英語によるアイルランド文学、特にイエーツ)が客員教授として就任されます。

\* 同じく、1996年4月より、三杉圭子氏(同志社大学大学院博士課程修了、米文学)が専任講師として就任されます。

\* また、新しい外国人教員二年契約制度で、Troy H. Titterington氏が外国語としての英語担当の専任講師として就任されます。

## 会 員 消 息

\* Barbara L. Cooney氏(本学専任講師)

米国 Norwich University で開催された PTSSR (Parents, Teachers & Students for Social Responsibility) 第5回世界大会(1995年7月末~8月初)にて研究発表。

\* 中村真由美氏(プール学院短期大学助教授)

1995年4月より1996年3月まで英国The University of Sheffieldにて研究。

\* 齋藤安以子氏

1996年4月より、摂南大学国際言語文化学部専任講師に就任。

\* 田中敬子氏(神戸商科大学教授)

1996年4月より、名古屋市立大学人文社会学部国際学科教授に転任。

\* 山本道子氏(聖和大学人文学部英米文化学科教授)

、聖和大学他で開催された、「シェイクスピアと歌舞伎」をテーマとした国際会議(日本シェイクスピア協会主催・1995年8月)に於いて研究発表。

## 会員による出版紹介

◇ 別府意子氏

『マディソン郡の橋』(ロバート・J・ウォーラー著・解説・詳注) 松柏社 1995年6月

◇ 林 和仁氏

『比較文学を学ぶ人のために』(松村昌家編) 世界思想社 1995年12月

◇ 平井雅子氏

*Dramas of Desire: Visions of Beauty* (Z. Ben-Porat. & H. Wirth-Nesher 共編) ICLA 1995年

◇ 伊藤栄子氏

『English in Use』(R・クワーク、G・スタイン著・共訳) 紀国屋書店1995年8月

# KCELS

## 神戸女学院大学英文学会 会則

(1) 名称

本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。

(2) 目的

本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構成

本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 活動

年一回、英文学会を開催する。

Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。

その他。

(5) (a)上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b)運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

### 内規

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

1995年4月1日施行

## 編集後記

仮設の校舎や研究棟が立ち並び復旧工事のすすむキャンパスで、慣れない90分授業に追い立てられた、そして次から次へとショッキングなニュースの続いた1995年度。“社会全般の変動期”に書かれ“時代や文化や言語”を越えて上演されるシェイクスピア劇についての青山先生のご講演は、表層は移り変わりつつも人間のそして人間社会の普遍性にあらためて目を向けさせていただいた、感慨深いものでした。

No.10でお約束しましたアンケートの結果。おかげさまで「会則」は整い成立いたしました。“その後”何かとお忙しかったなか、早速にお返事いただきまして有り難うございました。

### KCELS Newsletter 編集委員

(1995年度運営委員)

◇B. L. Cooney ◇原田園子 ◇金城盛紀

◇上 紀子 (ABC順)

## KCELS Newsletter No.11

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548